モシコイ

53860

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

集英組首領の一人娘である一条沙楽が金髪の百合少女と遭遇するお話。

＊この作品は以下の要素を含みます。

それらを許容できない方は閲覧しないことを強くお勧めします。

・性転換（一条楽）

・原作再構成（別名：原作改変、原作レイプ）

・キャラ崩壊（特に桐崎千棘）

・百合、同性愛、レズ

目　次

もしも一条楽が女の子だったら ―――― 1
一条沙楽の憂鬱 ―――― 16
青春ヤンレズ女は裏稼業娘ＮＴＲの夢を見ない ―――― 26

もしも一条楽が女の子だったら

話をしよう、あれは今から３６万……いや、１０年前だったか。まぁいい、二人の少女がある場所で出会ったんだ。過ごした時間は短かったが少女たちまるで親友のような仲良しになった。だが、少女たちは非情なる現実により引き裂かれてしまう。別れ際に少女たちはある約束をした。それが、この物語の始まりだ。

「ザクシャ　イン　ラブ」

長い髪を揺らし少女は語る。

「あなたは『錠』を、わたしは『鍵』を、肌身離さずずっと大切に持っていよう」

まるで壇上の劇団員のように。どこか大袈裟ではあるが、力強い決意とともに台詞を一つ一つ紡ぐ。

「いつか私達が大きくなって再会したらこの『鍵』でその中の物を取り出すから、そしたら……」

一息つくと彼女は目一杯の笑顔を浮かべる。全ては別離の悲しみを見せぬため。そして彼女は頬を伝う涙を拭くことなく言い切る。

「結婚しよう」

例え十年・二十年経とうが愛し合うことを誓う二人。もしこの約束が実行されれば二人の物語は感動を呼ぶ純愛ストーリーだっただろう。現代版ロミジュリだ。しかしその誓いに水を差す言葉が、もう片方の少女から放出される。

「けっこんって男の人とするものじゃないの？」

冷たい空気が二人の間を吹き抜ける。常識という絶対的存在に基づく容赦のない言葉の暴力が、彼女たちの間に何か良からぬ亀裂を生み出した瞬間であった。そう、全ての少女が同性愛者であるわけがないのだ。むしろ別れ際の感動的雰囲気を叩き斬った少女のように、異性との恋愛や結婚を求める少女の方が圧倒的多数だろう。先ほどまで熱弁をふるっていた少女はその点を見落としていた。しかしそんなことに怯む少女ではなかった。

「いい沙楽っ？　女の子同士でも結婚していいのよっ！」
少女はがしりと一条沙楽の肩を掴むと力強く言い切った。嘘だ。多様性が尊重される現代社会においてもなお、同性婚を認める自治体はごく僅かである。そのような事実を少女は知っていながらも彼女はそれを秘匿した。見事な隠ぺい工作だ。
「ううん、むしろ女の子同士が結婚すべきなのっ！」
それどころか正反対のことを伝えるという情報操作（マインドコントロール）を成し遂げた。ある種のイデオロギーの押し付けである。これには古今東西における全体主義国家の独裁者たちも脱帽だ。少女の鬼気迫る勢いに沙楽は思わず後ずさる。ドン引きだ。永遠に続くと思われた二人の友情にも埋められない溝が存在したということか。それでも勢いを失わない少女は息を荒げながら、こう続ける。

「百合こそが正義なのよっ！」

・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・

ある日の朝、黒髪の少女は台所で鍋をいじっていた。細く小柄な身体を軽やかに動かし腰にまでかかった黒髪をゆらしながら鼻歌混じりに調理するその姿は、神話世界の妖精のごとく美しく、またとてつもない良妻感がにじみ出ている。おたまで鍋の中身を掬い味見を終えると少女は台所から、ひょこりと顔を出し呼びかけた。
「みんな、ご飯出来たよ」
「ありがとうごぜぇやす、お嬢！」
小鳥のさえずりのように儚くも愛くるしい少女の呼びかけに対し、地獄の底から這い出てきたような野太い声で傷だらけの漢たちが返事をした。此処は近辺の元締めである有名ヤクザ、集英組の拠点である。組長の一人娘である一条沙楽は、その恐ろしい雄叫びに微笑み返すとお手製の朝食をならず者たちに配った。
「うんめぇ―！　流石、お嬢だ―！」
「いや～いつもすいやせん」

ならず者たちが口々に沙楽の料理を褒め称える中、若頭の竜が皆に代わって沙楽に感謝の気持ちを伝える。それに対し、沙楽は朝食をつまむ箸を下ろし応えた。
「気にしないでいいよ。みんな頑張ってるもんね」
そう言い微笑む姿はさながら聖母のようである。構成員たちはそんな沙楽に対して、有り難や有り難やと唱える。ＲＰＧの呪文みたいだ。しかし、なにもおこらなかった！　賢さが足りないからだろう。そんな下っ端どもを尻目に竜は、ところでお嬢、と話を切り替えた。
「今日のご通学はもしや徒歩で？」
「勿論。どうして？」
竜の問いかけに対して沙楽は首を傾げつつも素直に応える。すると竜は、いやぁ、と言いながらバツが悪そうに頬を掻いた。
「実ぁ最近見慣れねぇギャング共がウチの島ぁ荒し始めてやしてねぇ。お嬢の安全のためにもしばらくぁリムジンで通学して……」
「竜」
沙楽は竜の話を途中で遮った。沙楽の竜を制する声により徐々に雲行きが怪しくなる。沙楽は顔をあげると正面に立つ竜を睨みつけ、ドスの利かせた声で話した。
「よそ者に何を手間取っている」
突如、日常の和やかな空気が消滅した。その華奢な身体から放出される威圧に竜はごくりと喉を鳴らす。言葉が返せないのだ。反論を決して許さない暴君のオーラ。カリスマとは小手先の技術では偽ることのできない素質である。そして今の沙楽は、彼の畏怖する長のように他者を無意識的に屈服させる雰囲気（カリスマ）を纏っていた。その恐ろしさ。その偉大さ。その美しさ。その気高さ。まさに圧倒的王者、いや暴君、の風格である。
少女を中心に形成された空気はさながらダークファンタジーの世界であった。暴力的だが幻想的で儚げな、極道の女王とも呼べるような沙楽の姿。そして彼女からにじみ出る圧倒的カリスマとそれにより形成される幻のような雰囲気。その場にいた者は悪魔の魅惑にかかった人形のように見惚れていた。

はっと沙楽は冷静になる。今の場の空気は自分にとって不都合なもの、つまり組の跡取りは沙楽しかいないと組員たちが声を揃えかねない状況、であると察したのだ。
「と、とにかく！　私はリムジンには乗らないからね！」
沙楽はそう言い切るとカバンを持って家を出ようとする。構成員たちは部屋を出た沙楽を慌てて引き止めようと立ち上がり後を追った。
「そっそれはなりません！」
「お嬢！　考え直してくだせぇ！」
余談だが、強面の雄どもが血相を変えながら美少女を追い求めて立ち上がるその姿は凄まじい犯罪臭のする光景であった。

・―・―・―・―・―・―・―・―・―・

「お嬢！　今日も元気にいってらっしゃいませ！」
「いってらっしゃいませ！」
若頭である竜が見送りの言葉を叫ぶと周囲のならず者どもが続く。これが犯罪の蔓延る裏社会や人情もの映画のワンシーンであったら、ありきたりの光景だっただろう。しかし残念ながら、ここは現実世界の普通の高校の校門前である。顔中傷だらけの暗黒界戦士たちが、健全な学び舎であるはずの高等学校の前にいるのは、誰がどう見ても異様だ。
周囲の好奇の視線が沙楽の華奢な身体を突き刺す。既にオーバーキル状態だ。容赦ない視線に沙楽は眩暈と吐き気を感じた。こうなりたくないから沙楽は家庭状況を隠ぺいしたうえで高校生活に臨む予定であった。しかし、登校時に既に反社会勢力との黒い関係が公になってしまった今、もはや沙楽に残された道は一つである。ある意味熱のこもったエールをその細身に全て受けた沙楽は小さくため息を吐くと振り返った。
「いってきます」
微笑みながら旅立ちの言葉を紡ぐその姿は美しくも悲壮感と決意

を含んでいた。さながら月へ帰るかぐや姫のようだ。本当は他人のフリをしたかった。しかし悲しいかな、既に多くの生徒は彼女が黒いストレッチリムジンから強面のおじさまがたとともに降りている姿を目撃していた。故に彼女が彼らと無関係であるという言い逃れはできない。だからこそ沙楽は敢えて彼らに笑顔を見せることで、自分が大丈夫だということを示したのである。そうでもしないと血の気の多い構成員たちは道行く生徒たちに因縁をつけかねない。全ては沙楽の安全のために。しかしその過剰な保護が却って彼女の安寧を揺るがしているという事実にはいつ気づくのだろうか。

構成員たちによる見送りが終わったところで沙楽は、はぁとため息をつく。周囲に避けられることに慣れていることに悲しくなった。別に彼等に悪気がないことはわかっている。ただ少しばかり自由に放任してくれても良いのではないか。自分だって普通の女子高生のように新しくできた友達と談笑しながら登校したい。沙楽はかくりと肩を落としトボトボと昇降口へと歩いた。華奢な身体を縮めて歩くその姿はさながら傷心の姫君であった。そんな憂いをおびた悲劇の姫君(ヒロイン)の目の前に、突如少女が隣の塀から降ってきた。親方！　空から女の子が！

「えっ？」

軽やかな着地音とともに少女の周囲に煙が舞う。突然の事態に沙楽はただ茫然と目の前の様子を眺めていた。一体どこの世界に朝の登校時に、2メートル以上もある学校の塀から飛び降りてくる女子高生がいるというのか。ゴリラじゃあるまいし。つまり長い金色の髪を持つ少女はある種の超人（ニンジャ）であったといえる。アイエエエエ！　ニンジャ!?　ニンジャナンデ!?

超人少女の周囲から土煙が晴れる。風圧で長い金髪がふわりと浮かんでいた。少女自身は凛とした雰囲気を纏っており、芯の通った美しさを持っていた。すっと何事も無かったかのように立ち上がると、少女はちらりと沙楽の方へと目を向けた。すると宝石のように美しい碧眼を輝かせ、瞬時に沙楽の両肩を掴んだ。

「可愛い！」

「え？」
突然の奇行に沙楽は処理が追いつかず、二十世紀のパソコンのようにフリーズする。一方、金髪娘は鼻息が荒く眼も血走っていた。その姿は、いくら美少女といえども、不審者じみていて、どこか危険な香りがする。鏡を見ろ変態。おまわりさん、こいつです。
「あのっ！　もしよければっ職員室まで案内してくれるかなっ!?」
危険な不審者は沙楽に発言のターンを与えることなく強引に流れを変える。ずっと俺のターン！　アクティブな変態だ。必死すぎワロタ。いや、沙楽にとっては笑えない状況だ。一体何が悲しくて高校登校初日からこんな不審者に遭遇しなくてはならないのだろうか。妖怪のせいなのだろうか？　アクマヤ、アクマノシワザヤー。
正直、沙楽はこの少女（不審者）と関わりたくなかった。誰が好き好んで見える地雷を踏むというのか、バカジャネーノ。しかしその一方でこの少女を放っておけないという気にもなった。恐らく、登校の際に塀を乗り越えるほどには、非常識で何も知らないであろうこの少女を無視したら、この娘は登校時刻に間に合わないだろう。沙楽はそう確信した。生まれ育った環境の影響もあり、沙楽は義理堅い。だからこそ、このような見える地雷たる不審者少女にも手を差し伸べるべきか迷っているのだ。いつかきっと酷い目に遭うぞ。危険回避と人情。結局、沙楽は後者を選んでしまった。
「……うん。いいよ」
「じゃあ、いこっか！」
逡巡の後に沙楽が承諾すると即座に、不審者は沙楽の手を握りしめ沙楽を校昇降口へと引っ張る。ただ少女が踵を返した時、どこか懐かしい香りが沙楽の鼻を突いた。一瞬のことだったので彼女には判断がつかない。だがそれは紛れもなく、沙楽が嗅いだことのある匂いだった。

・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・

超人不審者を職員室まで送ると、沙楽は教室へと急いだ。常に余裕

を持って登校する沙楽にとって遅刻はなるべく避けたいものだった。結局、遅刻ギリギリで1年C組の教室に入ることができた。遅刻せずに済んだことに安堵した沙楽はふぅと一息つくと自分の席に座る。すると二人のクラスメイトが彼女に近づく。二人とも中学からの付き合いであり、友だちの少ない沙楽にとっては特別な存在であった。私のおじいさんが以下略。

「おーす、遅刻ギリギリだな。ヒメサマ」

「……その呼び方、やめてよ」

ジト眼で嫌悪感を示す沙楽に対し舞子集は、いやはや恐れ多い、と言い大袈裟にのけぞる。その姿に沙楽はため息を吐く。日頃からセクハラ発言が多い彼は女子のクラスメイトに敬遠されがちであった。しかし同時に彼は親しみやすいタイプの人間でもあり、彼の気さくさに沙楽は親しみを持っていた。まぁ友達であろうと例外なく、沙楽も集のセクハラ被害にちょくちょく遭っているのだが。

「沙楽ちゃん、大丈夫？疲れてない？」

そう言うと心配そうな顔をして、小野寺小咲は沙楽の顔を覗き込んだ。小咲は優しい人柄であり気遣いの出来る子であった。多くのクラスメイトは彼女の優しさに癒されており沙楽も例外ではない。マイラブリーエンジェル小咲たん。気の休まった沙楽は大まかに今朝の出来事について話した。すると集はその話に強い興味を示した。

「もしかして、それって今日来る美少女転校生じゃないか⁉」

興奮した彼は転校生について洗いざらい聞こうとしたが、チャイムによりそれを阻まれる。チャイムが鳴るのに伴いクラス担任の女性が教室に入ってきた。

「ほらーみんな席につけー。ホームルームするぞー」

担任である日原教子が呼びかけるとみな席につきだした。それに従い集も渋々と席へ戻る。その姿を見ながら沙楽は面倒な追求を逃れられたと内心ほっとした。しかしこれでめげないのが舞子集という男である。

「キョーコ先生！　転校生ちゃんはどこですか⁉」

席につくと集は真っ先に教子に対し質問する。集の貪欲さに対し、

教子は苦笑しつつも転校生を教室内に呼び込んだ。
転校生は教室の扉を開けると、金髪を靡かせながら教壇へと登った。その間、教室内のざわめきが静まった。突然の美少女の登場に皆困惑しているのだ。すらりとした脚、女神のように整った顔立ち、華奢な身体。彼女を構成する全てのものが生徒たちの目を惹きつけていた。
「みなさん初めまして！　アメリカから転校してきた桐崎千棘です！　母が日本人で、父がアメリカ人のハーフですが、日本語はバッチリなので気軽に接してくださいね」
転校生である桐崎千棘が挨拶を終えると室内のボルテージは最高潮にまで高まった。最高に「ハイ！　」ってやつだアアアアア。生徒たちは口々に、美人だ、かわいい、モデルみたい、と彼女のことを褒め称える。そうした賛美に照れつつも千棘は室内をキョロキョロと見渡す。そしてぽかんとしている沙楽と目が合うと満面の笑みを浮かべた。
「沙楽！」
嬉しそうに名前を呼ぶ千棘に対して、沙楽は何故か悪寒が走る。虫の知らせとでもいうべきか。生まれ育った環境の影響もあり、沙楽は危険を察知する能力がきわめて高い。そしてその長年の勘が今、彼女に危険を告げているのだ。不必要な歯車が一つ加わり、機械のような何かが音を立てて崩れていく。沙楽の脳裏にはそのような幻覚が浮かび上がっていた。

・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・

金髪の美少女転校生が沙楽の通う凡矢理高校にやって来てから数日が経った。新たな高校生活に沙楽は若干疲れていた。というのも件の転校生である桐崎千棘が沙楽に猛烈にアピールをしてくるのだ。さながら主人を見つけた忠犬のごとくじゃれあってくる千棘に沙楽は少々辟易しつつも戸惑っていた。千棘の明らかに好意に満ちた触れ合いは、恐れや嫌悪を向けられがちだった沙楽が未だかつて経験し

たことのない関わり方だったからだろう。
……とでも言うと思ったか？　そんなシリアス展開はない。話はもっと単純だ。沙楽はただ千棘の猛アピールにドン引きしているだけである。それどころか、もはやドン引きを通り越してある種のトラウマになりかけているようだ。美少女に迫られたら嬉しいはず？　鼻息が荒くて眼の血走った輩でも？　お前それ現実世界（リアル）でも同じ事言えんの？
とにかくそうした目まぐるしい日々を送る中、沙楽はとある部屋に父親により呼び出されていた。
「待たせたな、沙楽。ちょいと大事な話があるんだが……」
「いきなりどうしたの、お父さん？」
胡坐をかいて座る集英組組長、一条一征と向かい合う形で、沙楽は横座りした。やくざの首領としての父親による突然の呼び出しに沙楽は不安そうに瞳を揺らす。警戒する沙楽の目を見つめると、一征はふぅと息を吐き、話を始めた。
「実はギャングとの抗争が想像以上に激しくなってな。いよいよ全面戦争になりそうなのよ」
「……それって大丈夫なの？」
「いや、お互いにタダじゃすまねぇだろうよ」
白磁のように滑らかで真っ白な手に力が籠められる。無意識のうちに沙楽はスカートをぎゅっと掴んでいた。絹のように艶やかな顔に浮かぶ感情は、恐怖。無理もない。いくらやくざの娘とはいえ、彼女はまだ高校生だ。どんなに周囲に罵られようとも避けられようとも、自分のことをずっと励まし支え続けてくれた人たちが抗争により被害を受けるのではないか。父親や組員たちとの平穏な日常を崩されることへの恐れを沙楽は抱いていたのだ。その反応をじとりと見つめると、一征はいつも通りの調子で言葉を発した。心配はいらないと言わんばかりに。
「そこでだ。お前に少しばかし手伝ってもらいたくてな」
「手伝い？」
「なぁに、大したことじゃねぇよ。向こうの組の娘さんと親友になっ

てくんねぇか？」
　急な「お願い」に沙楽は身構えたが、「手伝い」の内容を聞くと、ふぅ、と安堵した。何てことはない。ただ友達になればいいだけの話だ。友人の少ない沙楽にとってはむしろ望むところだった。やったねさらちゃん！　友だちが増えるよ！　しかも同じような境遇にあるとなれば、きっとすぐ仲良くなれるだろう。そう沙楽は楽観的に思っていた。
「そんなことなら別にいいよ」
「おう、そうか！　いやぁ助かったわ」
　沙楽が快諾すると一征は豪快に笑いながら立ち上がった。そして隣の部屋の襖の前へと歩いて行くと、にやりと笑みを浮かべ沙楽の方を向いた。
「実はな、もう既に向こうさんには来てもらってるんだが……」
「さらぁぁぁぁぁぁ!!」
　襖が開くと同時に金髪の少女が沙楽へと突進してきた。上から来るぞ！　気をつけろぉ！　背格好からして同い年だろう。というか、同じ制服を着ている。何やら聞き覚えのある声に沙楽は嫌な予感がした。ぎぎぎと音をたてながら沙楽は、すりすりと顔を寄せてくる「お友達候補」を見た。得体のしれない少女は、沙楽を悩ませていた転校生、桐崎千棘だった。助けを求めようと周りを見たところ、千棘の父親でビーハイブの首領でもあるアーデルト・桐崎・ウォグナーが一征とともに笑い合っていた。そして彼ら以外に人はいなかった。孤立無援である。メーデー、メーデー。
「沙楽！　会いたかったよ！」
　千棘は目を爛々と輝かせ沙楽を見つめる。その様は読心術を知らぬ沙楽でも用意に考えている事が推察できた。どうせ、スゴイ！　私たちは運命の赤い糸で結ばれているんだ！　とでも思い込んでいるのだろう。この脳内お花畑め。マジ運命（デスティニー）とかクソだわ。
　一体どうしてこうなってしまったのか。沙楽は天井を見つめながら考えた。心なしか目が濁っているように見える。悲しみの～向こ

うへと～。きっと私は呪われているんだ。そうだ、そうに違いない。ファッキンジーザス。沙楽はそう自虐的になるほど精神的ダメージを負っていた。翼の折れたエンジェル状態だ。無理もない。心躍らせていた初めての理解者（予定）との邂逅がこんな結果（新しい素敵な友達が出来ると思った？　残念！　既知の変態でした！　という事態）に終わってしまったのだから。そんな辛い現実、知りたくなかった。ウソダドンドコドーン！　何はともあれ沙楽の、「似た家庭を持つ初めてのお友達」への期待は、一瞬にして粉々に粉砕されたのであった。

・―・

集英組とビーハイブの同盟が結ばれた翌日、双方の構成員を招いた大宴会が集英組の拠点で行われた。両首領とその一人娘たちが仲良しであるというのに、構成員たちがいがみ合ってるのは良くない。そのような発想から親睦会と銘打って開かれたのだが。

「極東のサルどもがっ！」

「あんだとこらぁ！　腐れメリケンがよぉ！」

双方の幹部的立ち位置である竜とクロードを筆頭に両陣営の構成員が火花を散らしている現状である。前途多難のようだ。

「全く、クロード君は……」

「いいじゃねぇか。元気なのはいいことだ」

その光景を両陣営の首領は苦笑しつつも酒を片手に眺めていた。止める気はないということだろう。何せ今日は無礼講ともいえる大宴会だ。ここで今までの確執を水に流してほしいとでも二人は考えているのだろう。千棘からのアプローチを適当にあしらいながら沙楽はため息をつく。何が起きるかわからないからこそ二人にはしっかりと両陣営の狂犬どもの手綱を握ってもらったうえで、平和な宴会がしたい。そう沙楽は思っていた。しかし目の前の喧騒は沙楽の理想と正反対の状況であった。うんうん、でもそれもまた宴会だよ。

「もう我慢ならん！　ここで始末してくれる！」

「上等だおらぁ！」
堪忍袋の緒が切れたとでもいうのか。竜とクロードの二人が互いににらみ合いながら勢いよく立ち上がった。それにつられて下っ端どもが各自の得物に手をかける。もはや戦争の一歩手前だ。第三次世界大戦か？　この事態に沙楽は思わず顔をしかめる。それは争いごとを目にしたくないから、というわけではない。下らない言い争いの延長線上に得物による抗争が起きるのが我慢ならなかったのだ。沙楽にとってやくざとは父親のように仁義を重んじるカッコイイ存在であり、むやみやたらに騒ぎ立て武器を振り回す馬鹿ではない。力の差を誇張し暴れるなど、まるでチンピラではないか。不愉快な気分になった沙楽は思わず竜の名前を呼んだ。
「竜」
透き通るような沙楽の一言が場に響く。流れ変わったな。姫君のご指名に竜はすぐさま反応する。いつもと様子が違うからだ。通常の沙楽が纏うオーラにはある種の甘さがあった。それは優しさでもあるし、気遣いでもあるし、配慮でもある。そしてそのような甘さこそが沙楽の良さである。しかし今の彼女にはそれがない。それどころか刃物のような鋭利さが今の彼女からは感じられる。一体何事かと竜は沙楽の顔色を窺う。
「耳障りだわ、黙りなさい」
有無を言わせぬ声色に、一触即発だった空気が一瞬で変わった。圧倒的な凄みをみせる沙楽にビーハイブの面々は惹きこまれる。そして同時に、華奢な身体から生み出されるプレッシャーに言い表せないような恐怖を感じた。年端もゆかぬ少女がそのようなオーラを纏っていることの異様さに理解が追いつかないのだ。
一方、集英組の組員たちは青ざめた。沙楽の表情、声色、雰囲気、全てが普段の愛らしい彼女からは連想できないような真剣さに満ちていたからだ。長年の付き合いから彼らは沙楽がお怒りであることを察していた。そして本来なら微笑んでいるはずの姫君が見せる怒りというものはとてつもないインパクトがあった。集英組の者どもはすぐさま両膝をつくと沙楽の方へと頭を垂れる。

「すっすいやせんでしたぁぁぁぁぁぁ!!」
「そこのよそ者も」
竜を中心として自分へと土下座する組員たちを尻目に、沙楽はクロードを指さす。突然、指されたクロードは戸惑いながら沙楽を見た。適切な対応をすべく慎重に観察している。まるで得体の知れぬものを目にしたかのような反応であった。
「下らないことでウチの組のもんに突っかかるな」
射抜くような沙楽の視線にビーハイブの面々はびくりと怯える。しかし自尊心の強いクロードは、たかが女学生にメンツをつぶされたことに対し怒りをあらわにした。彼は腰のホルスターにかかった拳銃に手をかけ少女を威嚇しようとする。だが沙楽の態度に変化はない。その様にクロードは余計怒りが増した。
「き、貴様……!」
「さらぁぁぁぁぁ!!」
クロード激昂しかけた瞬間に、千棘は沙楽を横から抱きしめた。そのタックルは某工業高校のラグビー部を彷彿とさせる見事なものであった。良いタックルだ。世界を狙えるぜ。沙楽を横から押し倒した千棘は、彼女の脇腹に顔を埋めると、さら、さら、と沙楽の名前を繰り返し続けた。まるで壊れたテープレコーダーのように。らりるれろ、らりるれろ。恐らく精神（ＨＤ）に重大な損傷があるのだろう。ここに病院を建てよう。
形成されかけていたシリアス空間が消滅する。スクラップ・アンド・スクラップ、全てをぶち壊すことだ。その代わりといっては何だが、気味の悪いギャグＺＯＮＥが成立した。そんなものは地獄の火の中に投げ込むべきだ。
突然の事態に双方の構成員と首領たちは、ぽかんとする。誰もが、千棘の奇行が理解できずにいたのだ。抱きつかれた沙楽もまた困惑することしか出来なかった。ただ一つ確実なのは、鼻息荒く沙楽の脇腹に顔を擦り付ける千棘は危険人物だと言うことだ。逃げろ、奇行種（クレイジーサイコレズ）だ！　黄色い救急車を呼べ！
一通り沙楽の感触を楽しんだであろう千棘は、突如身を起こすと沙

楽を抱きかかえた。所謂お姫様抱っこである。ふわりと浮く感覚にいよいよ沙楽は処理が追いつかなくなった。ロード中状態である。察しが悪いな、朴念仁。ハーレム物の主人公じゃあるまいし。そんなおバカなお姫様を尻目に千棘は息を深く吸うと胸を張り力強く宣言した。

「私、桐崎千棘は、一条沙楽と、婚約します！」

常人の理解の範疇を超えた千棘ドクトリンの表明に場の空気が凍る。まるで時間が止められたかのようにその場にいた人々は一瞬、活動を停止していた。ザ・ワールド状態である。そして時は、一征の豪快な笑い声と共に動き出す。刹那、両陣営の構成員たちは口々に雄叫びのような叫び声を出し始めた。柄の悪い多種多様な見た目の雄たちが騒ぎ慌てふためく光景は地獄絵図であった。皆が混乱し錯乱状態にある中、クロードだけが必死に千棘を説得しようと試みる。

「お嬢、いけません！　同性愛だなんて、非生産的な！」

「何よ！　どうして女の子同士で愛し合ってはいけないのっ!?」

クロードの説得もむなしく千棘はより一層態度を硬化させた。話せばわかる？　うるせぇ、くそして寝ろ！　もはや修復は不可能だろう。千棘の開き直ったともいえる清々しさはどこか既視感のあるものであった。ふと沙楽は十年前のある出来事を思い出す。ある少女との楽しかった日々。それをなぜか今になって思い出したのだ。思い出の中の、顔も名前もわからぬ少女。その少女はがしりと沙楽の肩を掴むと力強く言い切った。

『百合こそが正義なのよっ！』

ふっと沙楽は菩薩のような笑みを浮かべて目を閉じる。そして目の前に思い浮かんだ想像上の少女を黒く塗りつぶした。世の中には二種類の人間がいる。普通の人と変態だ。そして後者は人の話を一切聞かない。それは目の前の金髪娘も、思い出の中の変態少女も同じだ。そんな輩に何を言っても無駄だ。かといって阿鼻叫喚に陥った現状を打開する手立てもない。いっそのこと全てなるようになってしまえ。沙楽はそう諦めると全てを千棘に委ね、寝ることにした。悲しいかな、一般人と境遇の異なる沙楽は、諦めることに慣れてしまっ

ていた。全てが良い方向に向かうことを願いながら、騒然となる現世から沙楽は夢の世界へと堕ちていく。

一条沙楽の憂鬱

　突如、凡矢理市に襲来した桐崎千棘というクレイジーサイコレズの猛攻により、心身ともに多大なるダメージを負った一条沙楽。状況が良くなることを祈りつつ沙楽は一度気を失った。しかし意識の戻った沙楽に新たな試練が降りかかるのであった。

『……きこえますか…沙楽よ…今…あなたの…脳に…直接…呼びかけています……』

　周囲の見えない暗闇に、少女の声が響く。それを聞き沙楽はぼんやりと意識を取り戻した。

『私は天の声。あなたを導く存在です』

　突然降って湧いてきた素性のわからない声に沙楽は戸惑う。しかし、どこか聞き覚えのある声は構わずに続けた。

『サウジアラビアにこんなことわざがあります。砂嵐の後の夜空は奇麗、というものです』

　マイナーで胡散臭い格言を持ち出す自称天の声に沙楽は訝しむ。なるほど、わからん。なに言ってるんだお前、状態である。天の声は強引に続ける。

『私にも意味はわかりません。ただ一つ確実なことがあります』

　そう言うと胡散臭いペテン師は、すぅと息を吸い、続きの言葉を紡いだ。

『桐崎千棘という素敵な少女に嫁入りしなさい。そうすることが今のあなたが幸せになる……』

　頓珍漢なことをほざく声がする方向に、沙楽は無言でアイアンクローをした。

・―・―・―・―・―・―・―・―・

「あばばばば……」

　意識の戻った沙楽がまず初めに目にしたのは、自身のアイアンク

ローにより顔を掴まれた千棘のアホ面であった。沙楽の手により顔の両側を潰されていたため、タコのように唇を突き出していた。折角の美しい顔が台無しだ。しかし、残念だが当然の結果である。アホ面少女を冷めた目で見つめると、沙楽は問いかけた。

「……何してたの？」

「ちょ……ちょっと洗脳を……あばばばば！」

千棘は素直に犯行を告白した。それに伴い沙楽は握力を強める。馬鹿なの？死ぬの？黙秘権すら行使せず即座にゲロった千棘のお馬鹿っぷりに沙楽はため息をついた。しかし力は弱めない。やる時はやる娘なのです。

「お、お嬢。その辺にしておいてくだせえ」

徐々に紫色に変色していく千棘の無様な姿を見かねた竜が助け舟を出す。沙楽はじろりと彼を見つめた。不信感というべきか不快感というべきか。負の感情を込めて見つめてくる沙楽に竜はたじろぐ。何故こいつを部屋に入れた？　沙楽の表情は、そう問うているように思えた。

一瞬の間が生じた。ほんの一瞬。どんなに長く見積もろうと、その間は数秒だった。しかし、それは何時間にも及ぶものであったかのように竜は錯覚した。虚ろな目で不愉快さを露わにする我が姫君。そのあまりにも人間味を感じない姿に竜は恐怖を感じた。まるで処刑場で罪人の首を跳ね飛ばす処刑人のようだ。機械のように冷たくて容赦のない、冷徹な女帝であった。

「……ぎぶ……さら……ぎぶ……」

しかし千棘の腑抜けた声により、沙楽を中心に形成された不気味な空間が消滅する。死を覚悟した竜にとって、千棘は恩人であった。そして諸悪の根源も千棘である。これもうわかんねぇな。何にせよ、千棘のうめき声に気づいた沙楽は、いつもの雰囲気に戻るとアイアンクローを解除した。

ぽとりと畳に落ちた千棘は、げほげほと咳き込む。流石に心配になった竜は背中を擦ろうとするが、千棘に手で制された。しばらくして落ち着いた千棘は、軽く深呼吸をして呼吸を整える。そして沙楽の

方を、キッと鋭く見ると叫んだ。
「沙楽！　未来の旦那さんにＤＶなんてしちゃダメだよっ!?」
「黙れ」
妄言を吐く精神異常者の脇腹に、沙楽は蹴りを入れる。ケリ姫、スウィート要素はない。蹴られた千棘は脇腹を抱えながら畳の上に蹲った。それなりに痛かったようだ。普段の沙楽からは想像もできないような暴力行為に、竜は驚く。
「え、えっと」
「……竜」
かける言葉が思い浮かばず、どもっていた竜の方を沙楽は向くと、ドスのきいた声で問うた。
「何故こいつを家にあげた？」
仁王立ちする少女のまとう怒気は恐ろしく、背後に怒り狂う龍がいるかのようであった。その姿を見た竜が、ちょっともらしちゃったのはナイショだ。刹那、憤怒の化身が降臨した処刑場で不気味な笑い声が響いた。それは足元に、無様に、転がる千棘から発せられたものであった。
「ふ、ふふふ……おバカな沙楽」
「はぁ？」
ゆらりとゾンビのように立ち上がった千棘は、薄気味悪い笑みを浮かべている。見方によってはジョジョ立ちに……いや、見えないな。とにかく、よくわからん微妙なポーズをとっていた。
「私は、ひっじょ～にダ・イ・ジなことを沙楽に伝えるために、ここにいるんだよ」
意味深な回答をして、不敵に笑う千棘。沙楽は訝しむ。一体、大事なこととはなんだろうか。緊張感が場を支配する中、すぅと一呼吸をおいた千棘は、満面の笑みを浮かべて沙楽に告げた。
「沙楽！　今度の週末デートしよっ！」
この後、（沙楽が）滅茶苦茶ＤＶした。
・―・―・―・―・―・―・―・―・

大騒動のあった週末、沙楽は千棘とお出かけすることになった。曰く、親睦を深めるための交流イベントだとか。もちろん、周囲には二人を守るべくギャングやヤクザが張り付いている。現に、二人をナンパしようとした男が複数人、強面のおじさんたちによって裏路地へと連れ込まれていた。

「えへへへ、どこいこっか？」

そんな周囲の光景を微塵も気にすることなく、脳内花畑娘千棘は能天気に話す。有名な女性向けブランドの真っ白なトップスと緑のストレートデニムを着ていた。彼女のスタイルの良さが出ており、モデルのような立ち姿は周囲の注目を集めている。一方、沙楽は薄いピンク色のシンプルなワンピースを身にまとっていた。茶色いローファーとニーソックスを穿いている姿は、いわゆる清楚なお嬢様のようであった。こちらも周りの人々の視線を釘づけにしていた。しかし笑顔は全く浮かべていない。不本意ながらこの場にいる沙楽は、じとりと能天気に笑う千棘を睨んだ。しかし彼女を睨んだところで、このイベントから逃れることが出来ない（実際、沙楽は何度か試みたが、敢え無く阻止された）。強いられてるんだ！　流石に諦めた沙楽は、はぁ、とため息を吐くとぽつりと呟く。

「……映画館に行きたい」

「え？　何か観たい映画でもあるの？」

呟きに反応した千棘の顔をちらりと見ると、沙楽はバツが悪そうに頬をかいた。顔はほんのり赤くなっている。しおらしくなった沙楽は目配せすると、ぼそりと映画のタイトルを呟いた。

「……ニャックスの大冒険」

「そっか、じゃあそれを観にいこっか！（結婚しよ）」

年齢の低い層向けの動物映画のタイトルを恥ずかしそうに言う沙楽を見て、千棘は心の中で結婚を決意する。別に今更じゃね？とか言わない。愛の確認は実際ダイジ。とにかく千棘が沙楽の手を掴むと二人は映画館へと向かった。そしてそれに続くアウトローなオジサマたち。その日、『ニャックスの大冒険』は、ちびっこと傷だらけの漢

たちで満員であったという。

・―・―・―・―・―・―・―・―・

映画を見終えた二人は近くの公園のベンチに並んで座っていた。余談だが周囲には自称護衛たちが隠れている。そのため先ほどから多くの少年・青年たちが二つの美しい華に声をかけることなく散っている。

「いやぁ、あの映画面白かったね！」

「………ん……」

千棘の言葉に軽く同意する沙楽。そんな彼女は感動のあまり映画の途中で何度も泣いていた。また時には子供たちと一緒になって応援したり、笑ったりしていた。きっと彼女も映画自体は楽しかっただろう。ただその様子を一部始終、隣に座る金髪娘に見られていたため、今は恥ずかしさのあまりまともに話すこともできずにいる。一方、千棘は恋人に向ける様な甘くて優しい笑みを浮かべて沙楽のことを見つめていた。その視線の生暖かさが、沙楽は苦手だった。ベンチに座る二人は、見方によっては初々しいカップルのようである。

「あれ？　沙楽ちゃんと……桐崎さん？」

そんな二人に、ある少女が声をかける。ベンチに座っていた沙楽は、聞き覚えのある声に反応し思わず立ち上がった。

「……小咲？」

声の主を見ると、それは沙楽の友人である小野寺小咲であった。心底驚いた、という表情を浮かべると、小咲はいつも通りにこりと微笑む。

「こんなところで会うなんて奇遇だね。……二人で何してるの？」

こてんと、首を傾ける様は実に愛らしい。しかしどこか陰のようなものを今の小咲からは感じた。それはほんの僅かな、微々たるものであった。当然、愛しの少女とのお出かけにスーパー・ハイ・テンションな千棘には、感じ取ることなどできない。

「デートだよ！」

千棘は元気良く答える。その時、かすかに小咲の眉が動き、彼女の陰が増幅された。不信感?不快感?怒り?嫉妬?そういったドロドロとした負の感情の混ざり合ったナニカが、小咲から漏れ出た瞬間であった。しかしそのことに気づく者はいない。沙楽は千棘の首根っこを掴むと、彼女の左耳を自分の顔の近くに引き寄せた。

「お願いだから誤解を与えるようなことはしないで」

「こ……こわいよ沙楽」

ぼそりと小声で呟く沙楽に千棘は怯える。だって目がマジなんだもん。一流スナイパーも裸足で逃げる様な凄みのある瞳で千棘を睨む沙楽。

「折角の可愛いお顔が台無し……痛い痛い！　痛いよ沙楽！」

「わ・か・っ・た?」

「……はい」

内容はどうであれこそこそと相談する二人の姿は、何も知らない人からしたら仲睦まじいように見える。小咲も例外ではない。彼女は苦笑いをしながら尋ねた。ただし目は笑っていない。

「え、えーと……二人は付き合ってるのかな?」

「ちょ、違うよ!」

慌てて小咲の言葉を否定する千棘。その姿に小咲は首を傾げる。小野寺さん、あざとかわいい。そして千棘は満面の笑みを浮かべると、超大型の爆弾を落とした。

「付き合ってるんじゃなくて婚約してるの!」

想定外の言葉に小咲は固まった。エターナルフォースブリザード、相手は死ぬ。哀れ、小咲は笑顔のまま硬直してしまった！　一方千棘は、この世の幸せを独り占めしています!と言わんばかりに満面の笑みを浮かべている。殴りたい、この笑顔。頭がお花畑なだけあって自らが仕出かした罪がわからないようである。そして現状を正しく認識できている沙楽は真顔だ。表情からは感情が一切読み解けない。三者三様の顔をしているが、端的に言って正常とは思えない、異常事態であった。

何やら視線を感じた沙楽は隣に顔を向けた。見ると千棘が、太陽の

ように熱苦しくウザったい笑顔で、沙楽を見つめているではないか。さも誤解を解いたよ、褒めて！と言わんばかりの目をしている。それに気づいた沙楽はにこりと微笑んだ。愛くるしい、天使のような笑みである。その可憐な笑顔に反応し、千棘の幸せオーラが濃くなった。天使からご褒美をもらえると思ったのだろう。

が、次の瞬間、悲痛な叫び声をあげると、千棘は地面をのた打ち回った。悲鳴があがる直前、足元で、ぐしゃり、という悍ましい音がした。沙楽がローファーで千棘の左足を踏みつけた音だ。嗚呼、何と残酷な天使だろうか。微笑みを浮かべながら天罰を下すその姿は、無意識のうちに昆虫を蹂躙する無邪気な子供のようである。慈悲はない。蜘蛛の糸とは何だったのだろうか。

未だにあーあー叫びながら転げまわる千棘。残念だが当然の結果である。悪と愚者は滅びる運命なのだ。現実は非情だった。それは地面とダンスしている大馬鹿者にだけでなく、被害者である沙楽に対してもである。悲しきかな、阿呆に罰を下したところで誤解が晴れるわけではないのだ。

「おかしい。こんなことは許されない……」

見事に誤解した小咲は、ぼそぼそと淀んだ眼で呟いていた。何かに憑りつかれたように、その愛らしい唇から、聞き取ることのできない呪詛めいた言葉を延々と垂れ流している。ひくわー、小野寺さんマジひくわー。これには中学以来の友人である沙楽も若干引いた。親友の知らない面が知れたからといって、友情が深まるとは限らないということがここに証明されたのである。

・―・―・―・―・―・―・―・

波乱のデートは夕方まで続いた。結局、あの後小咲は一人でふらりとどこかへと消えてしまった。果たして彼女は大丈夫だろうか。沙楽はそう心配しながら歩いていたが、気付くと自宅の門の前に到着した。隣には微笑んでいる千棘がいる。その姿はさながら家までお嬢様をエスコートする紳士のようである。変態淑女なのに、変態淑女な

のに。
その姿を見た沙楽はふと今日の「デート」を振り返ってみる。千棘は終始、沙楽のことを優先してくれていた。それは映画、次の行き先、果てはランチのメニューまで、沙楽のために選択していたことからも察することが出来る。色々と考え直すと、今日の彼女の行動は全て沙楽を楽しませるためであるように思えた。そしてその優しさに沙楽は甘えてきっていた。久しぶりに我儘を他人に沢山言った気がする。沙楽はそう思うと胸に手を当てた。そんな彼女に一体自分は何をしてやれただろうか？その自問自答にちくりと胸が痛む。何も思いつかないからだ。自分が今までにしてやれたこと、あるいはこれから彼女のためにお礼としてできること。沙楽は唇をきゅっと噛みしめる。
「……ねぇ、桐崎さん」
「えっ……な、何かな!?」
決意をこめて千棘の苗字を呼ぶ沙楽。その声に反応した千棘は一瞬、悲しげな表情になる。しかしかぶりを振ると満面の笑みを無理矢理浮かべた。
「……ありがと」
バツが悪そうにお礼を手短に述べる沙楽。照れを隠すかのようにぶっきらぼうな声で、目をそらしながら、手をスカートと黒髪に添えている。笑顔すら浮かべていない、お粗末なお礼に千棘は一瞬、呆ける。ほんの数秒だろう。静寂が場を支配し、優しい春の風が二人の少女の髪をゆらしている。不意に千棘は吹き出すと、腹を抱えて大笑いし始めた。その姿に沙楽は困惑するしかない。笑いの収まった千棘は、目尻にたまった涙を拭うと屈託のない笑みを浮かべた。
「本当に可愛いね、沙楽！」
無邪気な笑みを見せる千棘にどきりとした沙楽は、その感情を打ち消そうと眉を寄せる。そして少しだけ頬を膨らませ、拗ねた。
「……なによ」
沙楽は不服そうにぽつりと呟く。そんな少女に一歩近づくと千棘は、手をお姫様の頭に添えて軽く撫でた。
「そういうところが　」

そして、沙楽の顔を引き寄せると。
「　大好きだよ」
軽く頬にキスをした。突然の事態に沙楽はぽかんと口を開ける。そんな沙楽に微笑むと千棘は彼女から離れた。
「とりあえず、今はこれだけで許したげる！」
そう言って舌をちろりと出すと、千棘は立ち去って行く。一瞬遅れて状況を理解した沙楽は、力なくその場にへたり込んだ。しばらくの間、ぼーっと婚約者様の去って行った方角を眺めていた。ふと、指で千棘に口づけされた場所をなぞる。脳裏に浮かぶのは先ほどまで一緒にいたはずの、少し色っぽい、落ち着いた雰囲気を纏った金髪の美少女。そしてほんの一瞬だけ、一人の女の子と真っ黒に塗りつぶされたナニカが思い浮かんだ。
「なんなのよ……もう……」
両手で顔面を覆う。顔は熱く、恐らく真っ赤だろう。一体どのような顔をして家に帰れと言うのだろうか。思わず沙楽は罵倒した。
「ばか……」
夕日に照らされた少女は、独り門の前で呟く。その姿は、ほんの少しだけ、少女漫画に登場する乙女たちと似ていた。

・―・―・―・―・―・―・―・―・

沈みかけの夕日に照らされ、周囲は茜色に染まっている。簡素な住宅街は静寂に包まれており、人はおろか鳥や動物たちの鳴き声も聞こえない。そこは非日常的な空間ではあったが、気味の悪い不気味さもなく、むしろ幻想的であった。そのような普段とは異なる雰囲気の道を、小野寺小咲は独り歩いていた。
「ふふふ、そっかぁ……」
小咲は何かに憑りつかれたかのように呟くと、焦点の定まらない虚無的な眼で空を見上げた。ぼんやりと、生気を抜かれた亡者のように。
「沙楽ちゃんも本当はこっち側の人間だったんだね」

口角をあげると愛おしそうに言葉を発する。心底嬉しそうに呟く少女の眼には既に光がない。しかし生気のない姿とは裏腹に、彼女は楽しげな雰囲気を纏っている。そして少女はにんまりと笑みを浮かべた。狂人のように薄気味の悪い笑みを。

「でもね……、ポッと出の女なんかに渡さないんだから」

闇に満ちていく黄昏の中、ケラケラと狂気めいた笑い声が響く。得体の知れぬ魔が世紀末を祝福するかのように。少女の首にぶら下がっている鍵がゆらりと揺れて鈍く光る。鳴り響く悪魔の笑い声に呼応するかのように。

「待っていてね、沙楽ちゃん」

一条沙楽の受難は始まったばかりであった。

青春ヤンレズ女は裏稼業娘ＮＴＲの夢を見ない

　校門の前で一条沙楽はため息を吐いた。どこぞの糞ＳＳの更新が鬼のように遅くていつの間にか元号が変わってしまいそうだからではない。そう！断じてそんな些細なことで悩んでなどいない！彼女の目下の悩みは、知らぬ間に婚約者になってしまった桐崎千棘のことである。

　彼女は今、千棘のことで頭がいっぱいなのだろう。というのも、千棘は絶世の美少女で天真爛漫、しかも優しくて強いという最強優良株なのだ！そんな彼女に惚れない人間がいるだろうか、いやいない！それは沙楽も同じ。彼女を見てから沙楽は食事は３食しか喉を通らないうえに８時間しか眠れない日々が続いている。やべーわーマジつれーわー。僅かながらにクマがありほんのりやつれている沙楽！そんな彼女に、私は心を奪われた！この気持ちまさしく愛だ！爆ぜろリアル！弾けろシナプス！うぅっうぅうう!!私の想いよ沙楽へ届け!!凡矢理町の沙楽へ届け！

「桐崎さん……朝からなに騒いでいるの」

「えっ?言葉にすれば願いは叶う、っていうから」

　朝のチャイムとハーモニーを奏でるように、アイアンクローの音と千棘の悲鳴が校内に響き渡った。

・―・―・―・―・―・―・―・

　ホームルームが始まる１０分前に沙楽はクラスに到着した。ガラガラと扉を開けて入る沙楽。そこに顔面が陥没した千棘が続く。前が見えねェ。

　刹那、彼女らのことをクラスメイトたちが囲む。さきほどまでほのぼのと談笑したりぼんやりしていたはずなのに、２人を見つけるや否や血に飢えた獣のような目で詰め寄ってくる。

「ねぇねぇ！2人ってもしかして付き合ってるの!?」

「百合!?百合なの!?」

「姫ー！うそだと言ってくれ！頼む！」
「え？え？」
「ちょ、ちょっとちょっとー、みんなどうしたの急に？」
突然の事態に混乱する沙楽と困惑しながらも流す千棘。聞けばとあるクラスメイトが２人のデートを目撃したのだとか。もちろん沙楽からしたら否定したいことだろうし、千棘もわざわざそんな地雷を踏もうとは思わない（なんと彼女は過去から学ぶことができるのだ！）。
カップルではないかという憶測に否定的な２人。格好のネタがデマであったことにクラスメイト達はわずかながらも落胆する。高校生たちはクラスメイトのそういう色恋沙汰に飢えているのだ。だが、千棘がクラスの外を見たことで状況は一変する。
「そ、そぉーなんだよねぇー！ウチらラブラブカップルでさぁー」
「は？」
ぎこちない表情で沙楽の肩を抱く千棘。その不自然な様と突然のホラに、沙楽も思わず底冷えするような声を出してしまう。雪の女王、爆誕。レリゴー、レリゴー。ガシリと千棘の両肩を掴むと教室の隅で２人だけの内緒話を始める沙楽。そんな２人をクラスメイトたちは生暖かい眼でによによと眺めている。くそっ……じれってーな。俺ちょっとやらしい雰囲気にして来ます!!
「ちょっとっ！桐崎さん！なんであんなこと言うの！」
「沙楽……悪いけど今はラブラブカップルのフリをして」
「いやっ！なんでそんなことを」
「窓」
「はぁ？」
「窓の外、見てみて」
いつになく真面目な千棘に言われるがまま窓の外に目を向けると……なんということでしょう！ビーハイブの幹部であるクロードが木の上からガンを飛ばしているではないですか！これには沙楽もドン引き。
「な、なんであの人あんなところにいるの!?」

「昔から過保護で……」
「あっ……うん」
悲しげにつぶやく千棘に同情してしまう沙楽。何を隠そう彼女も千棘同様、周りの怖いお兄さん方の過保護に悩まされてきたからである。どんよりとした雰囲気を察したクラスメイトたちは慌てて沙楽に詰め寄る。
「一条さんっ！結局のところホントに桐崎さんと付き合ってるのっ!?」
「もしかして私たちの勘違い!?ねぇ！」
「嘘だよな！嘘だと言ってくれ姫！」
「出会って5秒で即お付き合いってやつ!?それともフェイクニュース!?」
「う……うぅ～～～!!」
違うと言いはりたい。でもそれをするとギャングたちとの抗争が始まってしまう。唸り声をあげ葛藤する沙楽と冷や汗を流しながら見守る千棘。ついに、沙楽は悔しげにつぶやいた。
「婚約者……ですっ！」
湧きあがる歓声、広がる狂乱。美少女2人の交際宣言にクラスはお祭り騒ぎとなった。世界は愛で満ちている。一方、この世のものとは思えないほど苦々しげな顔で沙楽は俯いている。この日、凡矢理町の平和は1人の少女の犠牲によって保たれたのであった。

・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・

沙楽の一世一代の演技の裏側で、クロードは木の枝に腰かけながらスマートフォンで知恵袋サイトを真剣に凝視していた。木の上でお嬢のストーキングをしながらお悩み相談もできる。そう、ｉＰｈｏｎｅならね。クレイジーな人たちへ、Ｔｈｉｎｋ　ｄｉｆｆｅｒｅｎｔ。
打つ手なしで知恵袋サイトにすがる姿は、中世ヨーロッパで神に祈りすがった人々と重なった。だが、ベストアンサーに納得がいかない

のだろうか、クロードは額に青筋をビキビキとたてている。神は死んだって？それは流石のＡｐｐｌｅでも解決できない。本当に申し訳ない。

・ＩＤ非公開さん　タイトル：上司の娘さんが……

上司の娘さんが同性愛者でした。昔からの知り合いで、実の妹のように気にかけていた娘さんが同性愛者であることにショックを受けています。同性愛なんて非生産的ですし異常だと思います。また娘さんの言動から察するに、友情を恋愛感情と取り違えているだけのようにも思えます。どうしたら娘さんを普通の異性愛者に戻せるでしょうか？教えてください。

・ベストアンサーに選ばれた回答　Ｍａｄａｍ　Ｆｌｏｗｅｒさん

世界を１００人の村とした場合、同性愛者は１１人、村の人口の約１割であるといわれています。また全米での合法化を機に、同性婚を認める動きは世界的なものになっています。そうした状況下で「非生産的」「異常」と一方的に決めつけ、拒否することはとても排他的であり時代錯誤であるともいえるでしょう。また「友情を恋愛感情と取り違えている」と断定するのも、その娘さんに対する配慮が足りていないと思います。質問者さんは保守的で少し鈍感ですね。一度、娘さんとそのご家族が真剣に話し合う場を設けるべきです。そうすればお互いの誤解が解けて、より絆が深まると思います。

「こんなもの、机上の……いや、タブレット上の空論だ！」

そう吠えるとクロードは木の上からスマートフォンを地面にたたきつけた。まるで動物園の来場者にフンを投げつける猿のようだ。知能指数的には猿より格下だが……。キーキーと木の上で騒ぐクロードが、かけつけた教員に不審者扱いされて警察に連行されるのは、この５フン後の出来事である。やっぱり神様なんていなかったね。

・―・―・―・―・―・―・―・―・

「嘘だろっ!?　マジかっ！」
「二人ともいつの間にそんな関係に……」
「あら～^」
「キマシタワー」
　沙楽のクラスでは突然の百合発言にクラスメイトはざわつき始めた。転校してきたばかりの美少女がクラスのお姫様と恋人関係にあると主張し出したのだから無理もない。驚きと興味からクラスメイトたちは二人の周りを囲んで矢継ぎ早に質問を投げかける。既成事実ができてしまった今、もはや沙楽に逃げ場はない。それが世界の選択か……。
「愛しのお姫様が独占されてるけど、妬かないの？」
　宮本るりはちらりと包囲されている沙楽と千棘を一瞥すると小咲に問いかけた。彼女は、小咲が以前から沙楽に友情以上の感情を抱いていたことを知っている唯一の存在である。だからこそ、この事態に対して小咲が何らかの反応、それこそ泣いたり怒ったり、を示すと考えていた。泣いたらとりあえず慰める。怒ったら宥めればいい。るりは、そう考えて小咲の顔を見た。その同情ともとれる感情は、さながらソシャゲのガチャで新しいＳＳＲキャラが出た結果、使えない子になってしまったかつての強キャラに対して向けるものととても似ていた。ガネーシャ死んだｗｗｗ
　しかし驚いたことに、小咲は無言で微笑んでいた。何も知らない者が見れば、その微笑みは可憐で愛くるしいもののように感じるだろう。余裕のツラだ、キャリアが違いますよ。今にも人生の先輩としてるりにアドバイスしそうなくらいの貫録がある。いいかい、宮本さん。落ち着きをな、落ち着きを持ちなよ。それが、人間熱過ぎずも冷た過ぎずもない、ちょうどいいくらいってとこなんだ。
　だが、付き合いの長いるりは直感的に理解した。今、小咲は正常な状態にない、と。まるで人形のように完璧な笑みを浮かべながら、小咲は不穏なオーラを周囲に漂わせていた。何かがおかしい。いつものおどおどした調子とは異なる小咲を、るりは訝しげに眺めた。

「ねえ、るりちゃん」
クラスメイトに囲まれる沙楽と千棘を見つめながら小咲はるりに呼びかけた。トーンなどは普段通りだが、いつもとは違いどこか芯の通った声だ。気のせいかケツイのようなものが感じられる。気が付いたら、るりは小咲に見つめられていた。ぞわり、と背中に嫌な感覚がする。るりは、ぼそりと、弱々しく返事をした。穏やかじゃないわね。
「……なによ」
「少し……手伝ってもらっても、いいかな？」
小咲はそう言うと、再び沙楽たちの方へ向いて笑みを深めた。これから愉快なことをしようとする、無邪気だがどこか異常で残酷な笑みに、るりは一抹の不安を感じた。乾いた唇を動かして、思わずるりは小咲に真意を問うた。ぼくにはとてもできない。
「なに、する気？」
「んー……。いろいろ」
「いろいろって……あんたね」
小咲は、少し悩む素振りを見せた後、何ら意味を持たない漠然とした答え方をした。はぐらかしているわけではない。恐らく、小咲の中でも考えがまとまっておらず、今の段階では本当に「いろいろ」としか答えられないのだろう。素っ気なく答える小咲の態度に、悶々としながらるりは心の中で叫ぶ。あなた、いまおかしいわよ！
だが肘をつき若干上の空でクラスの喧騒を眺めている小咲に、それ以上追及したところで無駄だと感じたるりは、会話を断念した。何だか無駄に神経を使って疲れた気がする。そう思ったるりは大きなため息を吐いた。だが、るりがため息を吐いたとき、小咲はぼそりと言葉を発した。
「幸せ恋人計画……かな」
そう呟く小咲の瞳には、沙楽しか映っていなかった。

・―・―・―・―・―・―・―・―・

「桐崎さん、どうしてさっき教えた漢字をまた間違えているの？」
「でへへ～、ごめんね～」
「これ、３回目なんだけど」
「ちょっと集中できなくて」
「なんで？」
「ぷりぷり怒りながらも教えてくれる沙楽が可愛いからっ！」
「黙れ」
　ハッピーでラッキーなスマイルを浮かべる千棘の顔に、沙楽の投げた教科書が直撃した。ホーリーライトニング、ブックス！ぎゃふんと声を漏らすと千棘は畳に倒れた。ポケットなモンスターのように両目グルグル。グッナイ（さよなら）、グッナイ（さよなら）、グッナイ（さよなら）！
　るりの発案で始まった勉強会は沙楽の部屋で行われることとなった。初めての勉強会にテンションゲージＭＡＸな千棘はいつも以上に異常な言動が目立つ。友だちと一緒に勉強するということがそれだけ嬉しいのだろう。それを察してか、るりと小咲も生暖かい目で２人のことを見ている。
「やっぱり２人とも仲良しなんだね」
「いやいや、違うから。そういうのじゃないから」
「ふふ、羨ましくてちょっぴり嫉妬しちゃうな」
「小咲まで、そんな……」
　頬杖ついて呆れるるりと苦笑する小咲に、何故か居心地の悪さを感じる沙楽。ちゃんと千棘を撃退したのに……試合に勝って勝負に負けた気分だ。なんで負けたか明日まで考えといてください。四面楚歌な状況に沙楽も思わずこめかみを指で押さえてしまう。すると、お茶をいれていた小咲が、あ！と声を出した。
「……お茶、きれちゃった」
「あ、じゃあ蔵に取りに行ってくるよ。みんな少し待っててくれる？」
「私も付いてくよ沙楽！」
　立ち上がる沙楽に付いていこうとする千棘。その笑顔の下には隠しきれない下心がこもっていた。なぁ……スケベしようや……。すると彼女の額にスコーンと鉛筆が刺さる。

「少し……頭冷やそうか……？」
「はい」
有無を言わさぬ黒いオーラを纏った沙楽を見てしゅんとなる千棘。そんな光景に流石のるりも呆れてしまいため息を吐いた。ふと小咲の方を見ると、彼女は静かに微笑みながら沙楽を見つめていた。直感的にるりは察した。小咲はここで何かするつもりなんだ、と。

・―・―・―・―・―・―・―・―・

「どうすれば、いいんだろ」
蔵の中で茶葉を探しながら沙楽はぽつりとつぶやいた。独りの空間で誰に向かって言うわけでもなく悩みを口に出してしまうのは彼女の昔からの癖である。独りの空間って、なんかいいよね。びっくりするほどユートピア！
さて、今の彼女の脳裏に浮かぶのは笑顔の千棘。一応彼女の婚約者、らしい。だけどそんな実感はまるでない。なのに彼女の存在は日に日に沙楽の中で大きくなっていて、普段から彼女には悩まされてばかりだ。それは彼女の奇行ばかりが原因ではない。
「嫌いじゃないんだけど……でも、そういう好きではないし」
ほんのり顔を赤くしながらうんうん悩む沙楽。すっかり頭の中は千棘のことでいっぱいになっていた。沙楽からすれば千棘のことは嫌いではなかった。いや、むしろ好きなんだろう。少し変なところもあるが、基本的に沙楽のことを大事に想ってくれているし、ギャングに囲まれて孤独だった千棘は同じようにずっと独りだった彼女にとって、なくてはならない存在になりつつある。
好き、なんだろうなとは沙楽も考えていた。きっと自分は千棘のことを好いていると。ただ、その好きが千棘の言うような好きと同じかと言われると、わからない。沙楽にとって千棘は友達以上の存在になりつつあった。え、友情は百合じゃないって？なんだお前!?成☆敗するぞ！ｗｗｗｗｗｗｗｗ
どうでもいい百合討論はさておき、なんだかんだで絆されつつある

沙楽は既に千棘に毒されているといっていいだろう。だが悶々とする彼女は蔵の扉が何者かによって開けられていることに気が付かついていない。Ａｎｏｔｈｅｒなら死んでた。
「Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ｕｎｄｅｒｇｒｏｕｎｄ」
　蔵の中に響き渡る突然の声に沙楽はびくりと肩を震わせた。振り返るとそこには薄黒い笑みを浮かべた小咲が入口に立っていた。転校生百合ルートフラグを折りにきた女。さながら光の中から現れた短期決戦の鬼とでも呼ぶべきだろうか。転校生だ？貴様この野郎。
「……小咲？」
「沙楽ちゃんってさ、本当に桐崎さんと付き合ってるの？」
「え、あ、いや……」
　いきなり距離を詰めてじっと沙楽のことを見つめる小咲。そんな積極的な行動に思わず沙楽は後ずさりしてしまう。今日の小咲はどこかおかしい。沙楽は嫌な汗をかきながら異様な雰囲気の小咲のことを訝しげに見つめた。一方、小咲はそんな沙楽のことも気にかけず言葉を続けた。いつの間にか沙楽は蔵の奥へと追いやられていた。もう逃げ場はない。
「２人ともホントは付き合ってない、でしょ？でも事情があってそういうフリをしてる、とか？」
「……」
「ねぇ、沙楽ちゃん。私、沙楽ちゃんのことが好きなんだ」
「え？」
　ふいに沙楽は顎をくいと指であげられた。小咲より僅かに小柄な彼女は、自然と小咲のことを見上げる体勢になってしまう。夕陽が二人を照らす。その光景はまるでロマンス映画。美しくも儚い。そんな詩的で感動的な空間を小咲は自ら創り出していたのである。だが、あんなにも内気で大人しい片思い乙女だった彼女が、いったいなぜこんなことをできるまでになったのか？
　千棘と沙楽のデートを目にした彼女は苦悩し続けた。どうすれば自分の想いを伝えられる？どうすれば千棘に勝てる？そこで小咲に答えをくれたのが、アルベルト・アインシュタインでした。いや、正

確にいうならば成人向け漫画『ガチレズ！ＮＴＲアンソロジー』である。舞子氏の机から出土した一年モノの逸品だ。ここで小咲はすべてを学んだ。同性の想い人を奪い取るワザを、ぽっと出の泥棒猫を出し抜く術を。桐崎千棘の倒し方、知らないでしょ？彼女はもう知ってますよ。寝取りに自信ネキが誕生した瞬間である。

「んっ……」

「っ!!」

ズキュウウウン！二人の唇が重なる。正しくは小咲が沙楽の唇を奪ったというべきか。優しくも熱いベーゼ。くちびるは喋るためじゃなく、キミのためにキスするために咲いている。小野寺マジ半端ないって！

いったいどれほど接吻を交わしていただろうか。永遠とも感じられるし、あっという間の出来事であったような気もする。いつの間にか小咲はぽーっと呆けている沙楽から離れて微笑んでいた。沙楽を見つめる彼女の笑顔は底知れぬ恐ろしさを感じさせる一方で魅惑的な色気を発するものだった。もう千棘とキスはしたのかい？まだだよなァ。初めての相手は千棘ではないッ！この小咲だッ！ーッ。

「いつでもいい……いつでもいいから。沙楽ちゃんの想いを、はっきりと示して欲しいな」

そう言ってくすりと笑うと小咲はどこかへ去って行った。へたりと床に座り込んだ沙楽は、夕焼けのように顔を真っ赤にしてひたすら唸る。どうしてこうなった……！全部夢だったらいいのに！ところがどっこい……夢じゃありません……現実です……！金髪美少女の転校生（結局、大正義・正ヒロイン扱いされそう）と幼馴染の心優しい美少女（結局、当て馬系ヒロイン扱いされそう）に想いを寄せられる一条沙楽。これからの彼女の運命や、いかに!?彼女たちの闘いはこれからだ！